



—勲四等瑞宝章—

叙勲の歓び

黛民族舞踊文化財団

理事長 黛 節子

1991年、秋。今迄考えてもいなかった、叙勲のお知らせを頂きました。

かつて芸術祭でヒエツキ唄と赤いろうそくと人魚（小川未明作）で賞を頂いたとき、とても嬉しかったことを覚えています。

私は踊ること、踊を創ることを天職と感じとって、只ガムシャラに生きてきました。

——日本に根ざしたInternationalな踊り——これが私の念願でした。そのことは今も変わって居りません。然し、時折激しく落ち込む時もありました。そうしたとき、いつも『黛節子の育ての親は高村光太郎先生であり、良い友は岡鹿之助画伯なのだ。それこそが、私の唯一の誇りでもあり支えなのだ』との思いが私を勇気づけ、今日まで頑張ってきたのだと思います。

さて、叙勲とは全く思いもかけないことでした。正直いって驚きました。

こんな私に国が勲章を下さった!!

大きな喜びが噴水のように湧き上がってきました。私はその噴水を心ゆくまで浴びに浴びました。そして黛節子をこのように選んで下さった多くの方々の思いやりと、励ましに感謝しきれぬ感動を覚えました。

初め、世間知らずの私は「勲四等瑞宝章」のもつ重みを知りませんでした。改めてこれは女性文化人にとって、大変な栄誉であることを知りました。

然し今静かに考えます時、私はこの度の栄誉を単純に飲むことよりも、今後、黛節子の舞踊芸術に課せられた責任の重大さに対し、どのように生きるべきか、その思いが渦になって身体の中を駆け巡っています。

楽しい楽しいライスロード民族舞踊交流の旅

黛民族舞踊文化財団訪中団 団長 黛 節子

期日

1991年4月26日より5月8日までライスロード少数民族舞踊と日本民族舞踊との各年交流(1985年より開始され6年に及ぶ)

4月26日

JAL 733 便にて香港へ、香港泊。(団長)黛節子 安本義正 藤原明人 花柳衛吉 黛智英 黛莉香 一行6名



周先生宅での懇談

4月27日

中国南方航空 342 便にて昆明へ、刘副主席、芸術学院院長葉公賢先生、周先生、鄧さん他の出迎えを受け再会を喜び合う。昆明では今年は西瓜の当り年で、いつも明るく茶目る周先生から、西瓜のプレゼントあり、飛行場の広場でパクパクと一同立食い。日本では味わえぬ開放感も加わり、おいしい、おいしい、え？ 食べカス？ 勿論心配御無用周先生が大きなバケツへバリバリと片付けて下さる(雲南歌舞団第一の振付師の先生が、である。)



見事な西瓜でのフルーツカクテルボンチ



雲南芸術学院葉院長の祝宴

4月28日

雲南芸術学院で、舞台公演打ち合せ、舞台稽古・本番
日本民族舞踊公演プログラム

1. 五條の踊り (奈良吉野)
2. 巫女舞 (岩手県、岳の神楽より)
3. 三つ面 (江戸、東京)
4. 鷺舞 (山口県、津和野)
5. 祝い唄 (沖縄)
6. はねこ踊り (福島県)
7. 上り口説 } (沖縄)
8. 黒島口説 }

公演後、相互に民族舞踊交流、座談会、実技交換
日本は、中国側の希望により、はねこ踊りを指導
中国より、白族舞踊の霸王鞭、霸王棒、八角鼓、手布舞の指導を受けた。

佐賀ゼニ太鼓に似ている八角鼓



(特別賛助会員)

有 田 平 中 田 乙 一
森 武 雄 上 田 彦 二
(A. B. C順、順不同=敬称略)

(賛助会員)

赤 坂 久
赤 原 秀 雄
秋 山 隆 志

秋 山 綾 江
浅 野 恒 史
浅 野 さ わ
阿久津 順 子

有 馬 臣 子
朴 一 柱
朴 泉 美
番 道 栄 作

4月29日

少数民族衣服製作所見学

リス族、苗族の衣服作製依頼。

午後、ジェット機にて西双版纳へ去年この就航により、わずか40分で水かけ祭で有名なシーサンパンナへ来られるようになった。この事実によって、シーサンパンナはよみがえった。

飛行場も、ホテルも見事に美しくなり、活気に溢れた。この様な変動は何度もここを訪れた私にとっても、大変嬉しい事だった。刀副州長、朱先生（やせていらしたのに、すっかり太って元気になられた）刀先生他多数の方々の出迎を受ける。

“シーサンパンナの朝粥”は黒米で作られその味のまろみ（とろみ）厚みは見事なもので一行の（特に名を秘す）中で毎朝五杯もお代りしたヒトもあるんですヨ。

4月30日

9時30分より学術交換

14時 西双版纳景洪劇院舞台稽古

同劇院にて本番

中国側 4曲

日本側 8曲

3000人からの観客に大喝采を浴び、花束と亜熱帯に咲く香り高い白い花のレイを頂く、何貴副州長（ジノー族）はじめ政府要員観賞、舞台終演後挨拶を受ける。

5月1日

朝食後、ジノー族村に出発、中国雲南省西双版纳傣族自治州景洪県基諾郷人民政府に到着、ジノー族の方々に逢う。この人々とは深いお馴染み、何桂英さん（彼女はジノー族の看板娘）はじめ懐しい顔ぶれの再会に大感激！この日はメーデー、村落あげての運動会広い広い校庭で。音の再生設備も見事、早速お互いに、民族舞踊の交流が始まった。何と和やかで楽しい日であったことか！——雲南少数民族舞踊友好の旅は何をおいても、踊り、踊り、踊りで明けくれる。黛節子にとって踊りに埋まる事の出来るその時こそ生き甲斐と舞踊家のほこりに満ちた人間になれるのである——

5月2日

9時30分、西双版纳歌舞団の要望にてはねこ踊りの指導（団のスタジオ）



沖縄上り口説

少数民族の舞踊家達は、はねこ踊りが好きである。この踊りは左右の手に持つ日の丸扇子をくるり、くるりとこぐり乍ら、飛んだり、はねたり、そして、“はねこだ、はねこだ、はねこだヨ!!! アイヨッ!!”と受け答え乍ら、アア何と忙しい踊り!!と思う程のものである。然し彼等達は“あねこ。とは発音出



津和野・鷺舞

来るが“はねこ。とはなかなかむずかしい様で、男性、女性の団員、キャッキョッといひ乍ら“あねこ。だ、あねこだ”と騒いでいた。相方共に楽しかったし面白かった。

2時、思茅に出発。思茅紅旗会堂につく。岩宰団長他の出迎を受ける。団長（傣族）はかつて財団で日本へ招待し、象脚鼓（タイ族独特の太鼓）シャンジョークの名演技を披露して頂いた。夜は思茅歌舞団の踊りを見学。さすが“米”の民族だけあって踊りの中には田植、刈入れ、豊年の喜びの振りがあり、シャンジョークの伴奏により、活力溢れたものとして楽しませてくれた。日本と全く同じといえる感性と動作でライスロードの同一性、類似性を目の当り見て今後の交流の重要性に大きな確信を覚えた。

5月3日

午前10時傣族の舞踊について座談会。刘副主席、岩宰団長、団員、日本側黛他。紅旗会堂にて舞台稽古、引き続いて本番。

思茅地区人民対外友好協会会長毕国光氏（アイニー族）の挨拶によって本番の幕はあいた！（当夜は観客が会場から溢れたそうのでこの様に観客の多かった事は無かったとの事）

終演後思茅地区の報道官の取材にこたえ、黛理事長を中心として人民対外友好協会毕国光会長、刘副主席、通訳その他出席。5月4日

思茅歌舞団に於て日本民族舞踊指導、アイニー族の鈴舞のVTR観賞の上その指導を受ける。思茅の皆様より象脚鼓（太鼓の一種で当財団が希望していたもの）のプレゼントを受ける。



黛理事長と雲南省陳立英副省長

（賛助会員）

江戸英雄
遠藤和良
遠藤昌孝
遠藤照子

呉慶子
呉在恒
笑二三枝子
花柳衛吉

花柳宗岳
原文兵衛
原山ゆう子
原田良子

春山美智子
長谷川房子
蓮沼力太郎
平田智佳子

平山芳子
平野理定
藤原としえ
藤原明人

5月5日

思茅地区民族中学にて公演

張木生校長他諸先生の出迎を受ける体育館にて日本側は四曲紹介

思茅地区の出席者

文化局長	陳天一氏
人民対外友好協会会長	毕国光氏
行政公署外事弁公室主任	查宗炳氏
美術家協会主席	王舜氏
文联常務副主席	刘志強氏

5月6日

劉副主席、黛団長午前中会談、一同西双版纳より空路昆明へ。

5月7日

中華人民共和国雲南省副省長陳立英先生の訪問を受け、通訳周紅先生によって会談がすすむ。少数民族を日本に紹介して下さる黛団長に感謝の意が述べられる。黛団長もこれからも永年隔年交流に努力を惜しまない旨を更に約す

空港へ出発、刘先生、周先生、尹先生、皆様と別れを惜しんで香港に向う。刘先生はじめ皆様忙しい時間を私共との交流の為に、つききりで成功に導いて下さった好意に心から感謝申し上げた、ありがとう!!再会!!

飛行機が遅れて6時間待って香港着、香港泊。

5月8日

無事大任を果たし黛団長他5名帰国。ノ



思茅での記念撮影

(評価)

ノ 私ども一行の受け入れについては中国舞蹈家協会雲南分会が熱意をもって実施、日程についても当方の希望を全面的に盛りこみ好意的な配慮がなされた。お陰で私共の日本民族舞蹈の紹介、指導等予想以上の成果をあげることが出来た。又少数民族舞蹈の取材についても許される限りの機会が提供され多くの収穫があった。特に景洪劇院、紅旗会堂に於ける公演は熱狂的な歓迎を受け、民族舞蹈を通じて日中友好交流の実をあげることが出来た。今回で訪中は3回目となり、各地で政府要員に大歓迎を受け舞蹈交流、学術交流も中国側の熱烈なる日本民族舞蹈に対して、意見、疑問が殺到して思う存分の発言と目的を果たす事が出来た。言挙げの下手な日本人にとってよい機会と思う。

1992年は財団として雲南少数民族の人々を招請することになっている。

雲南の思い出

昆明を飛び立って1時間足らずでシーサンパンナ・タイ族州の州都景洪に着いた。広々とした水田地帯のただ中にか所だけ白く光る新空港。降り立った大地の上を吹く風が5月にしては暖かすぎる。燦々と降り注ぐ陽の光、林立するバナナの樹、ここはたしかに亜熱帯の国。

歓迎の宴を催してくれるという。名にし負うシーサンパンナ歌舞団の姑娘たちが着飾って迎えてくれる中、象脚鼓と鉦鐃のひびきに包まれながら私たちは席に着いた。テーブルの上は御馳走の山。そして小さな舞台の上ではジノ族やタイ族のおどりや歌が次々と演じられた。中でもタイ族の孔雀舞はこのうえなく優美で、見る人を魅了させた。歌舞団の人たちはその次は日本の客人の番だという。今日は少数民族の踊りを見られると思っていたのにまさか自分がおどるはめになるうとは…。

景洪での公演が無事に終わり、攸楽山にジノ族の踊り取材に行くことになった。マイクロバスにゆられて2時間余り、山の上の人民政府の建物に着いた。まわりの家々ののき下にはうずたかくまきが積まれ、ひとむかし前の日本の農家を彷彿とさせた。最初の主役は子供たち。おそろおそろバスのまわりをとりかこんでそと中の様子をうかがう。こちらがドアをあけて近づくとわっと逃げ散り、また集まる。勇気のある2、3人が他の子よりも前に出る。側によるとあとずさりする。でもみんな目が笑っている。

広場でジノ族のおどりが始まった。中央に月とその輝きをかたどった太鼓が据えられその前で男女の踊り手が対になり、またある時は円をえがいて素朴なおどりをくりひろげる。プロアボ(月の花びら)の伝説。恋人にあげようと山奥にスアボ(ジノ族の一番好きな花)を摘みにゆく娘の歌。そして焼

藤原 明人

畑に穀物の種をまくようすを舞踊化したとも思える竹ざおのおどり…私は「はねこ」の衣裳を着ているのも忘れて夢中でビデオカメラを回し続けた。

うちとけた子供たちが木から花のついた枝を折ってバスの中にさしだした。お別れのあいさつなのだろうか。ノーミヤ(さようなら)といったら顔を見合わせていた幾人かがいっせいにノーミヤと答えた。人なつこい笑顔と澄み切った瞳が今も臉に残る。さようならジノ族の子供たち。

最後の公演の地思茅で2年ぶりに歌舞団団長の岩幸氏と会う。黛理事長の感激もひとしおだろう。歓迎宴では岩幸氏自ら楽隊の指揮棒を握り、象脚鼓を打った。阿トさんの歌うワ族やラフ族の民歌がすばらしい。タイ族の姑娘が川で髪を梳くおどり、ハニ族の躍動的な群舞、そしてきわめつけは副団長の日本語の「ソーラン節」。

思茅地区はシーサンパンナの名前にかくれて日本ではあまり知られていないがここも十八の少数民族を有する歌と踊りの里である。

この歌舞団もたびたび村里に入って民族舞蹈を採集し、それを基にして新しい芸術を創り出している。そして上海で公演の話があれば汽車で2日の距離をもととせずに出かけてゆくのである

わずかの間だったが雲南とそこに住む人々のやさしさにふれたような気がする。そしてその「やさしさ」は長いれば色あせてしまうようなたぐいのものではないことをいつの日にか実証してみたいと願っている。

(財団中国担当研究員)

(賛助会員)

藤井玲子	深水つきの
藤本佳子	福渡誠
藤田幸子	深谷幸市
深沢幹一	古在由秀

古口美江子
穂苺甲子男
星野紘
細野美智子

細谷誠
堀内実子
犬丸直
石井みどり

石塚保
井上高志
井上正美
入方宏

稲作と日本芸能

学習院大学教授 諏訪 春雄

日本の稲作農耕文化がどこから渡来したかという問題については、照葉樹林文化論と結びついて、中国の雲南省とインドのアッサム州を結ぶ地域に起源を求める説が一般化している。この地帯から発した稲を含む雑穀農耕文化が中国長江下流の江南地方を經過して南朝鮮と西日本に及んだという考え方である。この雑穀農耕文化の複合体の中から稲が独立して比較的早い時期に水田稲作が成立したとするのである。

この説を支える重要な根拠はアッサム雲南高原地帯に野生稲が発見され、さらに3、4年前に遡る栽培稲が見出されていることで、今も日本の学者でこの説を信奉している人は多い。

しかし、最近の中国における考古学の進展はアッサム雲南稲作起源説を完全に崩壊させた。中国の長江下流の河姆渡遺跡や羅家角遺跡からはそれよりも3千年以上も古い6、7千年以前の栽培稲が出土しており、稲の原産地を江南に求める説はもはや確定したといってよい。

しかも、稲作江南起源説の強みはその日本への伝搬者をもかなりの確度で想定できることである。江南の地方、現在の江蘇、浙江、福建、広東などの地には紀元前十世紀のころから越、紀元前六世紀のころから呉の国が栄え、中原の漢民族とは異なる

独自の文化をつくりあげていた。稲作もかれらによって最初に手掛けられた可能性が推定される。また、越人は中国の史書では倭と呼ばれていた。かれらは紀元後三世紀のころ、南下してきた漢民族に滅ぼされ、各地に散っていったが、その一部が日本の縄文晩期のころ、稲を携えて、北九州に渡来していた可能性は高い。

越に代表される江南文化と日本の古代文化には偶然では片付けられない類似性がある。蛇・龍にまつわる信仰、海幸・山幸の神話、魚撈習俗、鵜飼、暦、柱信仰、年中行事、歌垣、青銅器・鉄などの金属文化、祖先信仰などなど、枚挙にいとまがないほどであるが、ことに稲作に関わる儀礼には顕著な一致がある。

日本民族を単一の稲作民と限定することは、もちろん、誤っているが、しかし、弥生以来の主要生産手段が稲作農耕であったことは事実であり、したがって、日本人の習俗や文化で、稲作に由来するものの種類と数は多い。芸能にかぎっても、神楽、田遊び、能、歌舞伎、舞踊、民謡など稲作の儀礼と結んで発達したものが、中心を占めており、その解明は日本芸能の本質に関わっている。中国、朝鮮を視野に入れたアジア的な規模での日本芸能史の再検討が目下の急務になっているのである。



シーサンバンナの寺院

「思茅文芸」8月号より '91年8月号より

1991年5月2日至5日、以黛節子理事長を首的日本黛民族舞蹈文化財団訪華団一行6人、在雲南省舞協副主席劉金吾陪同下、來思茅進行為期三天的訪問交流，受到了思茅地區人民對外友好協會會長畢國光、副會長查忠秉、行署文化局局長陳天驥、地區文联常務副主席劉志強和地區民族歌舞團的熱情歡迎。

訪問期間，日本舞蹈家和地區民族歌舞團的演員同台表演了中日兩國民族舞蹈。

(訳文)

1991年5月2日から5日まで黛節子理事長を団長とする日本黛民族舞蹈文化財団訪中一行の6人が雲南省舞路家協会副主席劉金吾氏と共に思茅を訪れ、3日間にわたり交流をしました。思茅地区人民對外友好協會會長畢國光、副會長查忠秉、地區政府文化局局長陳天驥、地區文联常務副主席劉志強的各氏及び地區民族歌舞團が訪中一行を心から歓迎しました。

一行の訪問期間中に、日本舞蹈家と思茅地区民族歌舞團とは同じ舞台の上で中日両国の民族舞蹈を公演（披露）しました。

(賛助会員)

石原 収 吉
岩 瀬 敬一朗
井 浦 芳 信
稲 田 とし子

石 川 隆 一
石 田 一 良
飯 島 芳 江
伊 藤 より子

伊 藤 陽 子
伊 藤 智香子
城之内 金 洋
栗 原 宏

栗 原 ひろ子
小早川 勝 登
桑 田 美弥子
倉 島 攝 子

杵 屋 佐登代
海 野 洋 子
加 藤 淳 平
加 戸 守 行

何で？中国との深い交流が始まった？

理事長 黛 節子

思茅では地区人民对外友好協会、毕国光会長を中心に何度となく宴が開かれた。その席上会長は“黛团长は中国を大変愛しておいでそうですね。6回も我々との交流していただけたのはどの様なことで始まったのでしょうか？”との質問をされました。私は静かに答えました。“それは母のおかげです。”“ハア？”実は母はいつも私に“節子さん中国という御国は、あの様に歴史の古いお国でしょう、だから文化的にも素的なものを残しているのよ、日本のことを勉強するのも大切だけれど、まず中国、韓国のもを貴女の手で見て研究するのが、母さんはいいと思うの、中国との国交が再開されたら、まず中国へ行ってらっしゃい。”と、幸にもその願いは叶えられ1985年に北京、上海を旅することが出来ました。私の心にあった中国の伝説や夢や文化をまのあたりに見た事は大変な喜びと驚異と実在感でどう表現して良いのか解からなかったのを覚えています。それから機会ある毎に中国を訪れました。その様な行動が、今のこの温い友好交流のもとになりました。いわば母のおかげです。“そうでしたか、そして現在今、団長の媽媽は？”“いえもう亡くなりました……。毕会長は遠くを見るように想いをはせていらしたようだったが、つと立ち上り“こうした意義ある友好のもとを開いて下さった、節子团长のお母様に黙禱を捧げたいと存じます。皆様は静かに立ち上り、私の母の為に祈って下さった。

はるばる中国雲南の地に於いて、民族は異ってもお互いに人間同志の

あたたかい心の交流のもとに、他国の舞踊家の中国を愛した一人の母の為に、その霊をなぐさめて下さったのである。その皆様のお心づくしを亡き母はどの様な誇りある喜びとしていたことでありましょう。まして娘である私の感動はどうここに記してよいのか解からないものです。

これこそ人間の心と心のつながりでなくて何でありましょう……。この日の感動こそより深いきずなとなり今後の文化交流の大きな原動力として湧き上ると信じて居ります。

何をするにも愛情と情熱なのだと思います。毕会長はじめ皆様、この様なきずなをお作り下さいましたお心に深く深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



黛理事長と毕国光会長

毕国光会長より理事長への手紙

黛節子理事長：

今年5月、您和您的舞蹈代表团对云南思茅的访问和在思茅精彩的演出，给思茅各族人民留下了深刻而美好的印象。

中日两国人民的文化交流有着悠久的历史，新中国成立以来，随着中日邦交的正常化，经济和文化的交流得到了长足的发展。1985年以来，黛节子理事长为首的日本舞蹈团三次来云南思茅访问，不仅带来了日本人民的友谊，而且同思茅民族歌舞团相互交流了中日两国的民族舞蹈，为弘扬两国的优秀民族文化作出了积极的努力。

这次访问的时间是短暂的，但结下的友谊却是长久的。让我们今后共同努力，继续为增进中日两国人民的友谊，扩大中日两国民族文化的交流作出贡献。

思茅地区人民对外友好协会 会长 毕国光
副会长 查宗炳
思茅地区文学艺术界联合会 副主席 刘志强

一九九一年十二月

(訳文)

今年5月、あなたとあなたの舞踊代表団が思茅を訪門し、すばらしい公演をされたことは思茅の各民族の人々の心に好ましい印象となって深く刻まれました。

中日両国の国民の文化交流には長い歴史があります。新中国が成立してから中日国交の正常化に伴い、経済及び文化の交流は長足の発展を遂げました。

1985年以来、黛節子理事長を主とした日本舞踊団は3度雲南思茅の地を訪れ、日本国民の友情をもたらしたのみならず、思茅民族舞踊の交流を行い、両国の優秀な民族文化をお互いに広めあう積極的な努力をしました。この度の訪問時間は短くても結ばれた友情は長く続きます。私達は今後もお互いに努力して中日両国の国民の友情を増進し、中日両国の民族文化の交流を拡大する為に貢献していきましょう。

(賛助会員)

木田 礼子
桑原 雅子
黒崎 守
菅 寿子

駒屋 和子
川畑 洋子
木下 邦二
木下 純寛

桑原 玲子
小泉 吉三
小泉 三枝子
小松 厚子

小沢 恂子
北川 太一
桃沢 佳乃子
神田 千代

亀岡 重則
神山 美恵子
菅見 正次
工藤 延雄

金白峰さんと黛さん

駐日大韓民国大使館

韓国文化院院長 金 光植

民族芸能の根深さについて、舞踊を通して研究しておられる黛節子さんが先般、私もよく存じ上げております韓国の著名な伝統舞踊家金白峰さんを招いて、東京・赤坂で、「韓国伝統舞踊の会」を開かれました。

当初、私は、会場の黛アート・サロンには、フロアより一段と高くなっている舞台がしつらえてないので、その舞踊を人びとに見せる場合、不便ではないかと、いぶかりました。

ところが、金白峰さんの、そのフロアでの舞踊は、その絶妙な美技に魅かれて、ただ見入るばかりの観衆との間に一部のスキもなく、人びとに限りない感銘を与え、成功を博したのでした。

金白峰さんの舞踊は、大胆にして微妙、人間の孤高の精神を崇高に表現したかと思うと、その反面、大らかで豊饒な喜びを“飛翔”のように舞い踊る……。そして純白の長い布は『天と地』、『靈魂と肉身』の絆をあらわした“真理の脈”であり、これこそ神の摂理ではないかと思われ胸を打たれました。

ともかくにも、金白峰さんは満身の力をこめて美しくも強烈に踊り続けたのでした。果たせるかな、金白峰さんが韓国へ帰って最初に掛けてきた電話で黛節子さんに伝えたことは、次のような言葉だったと聞きました。「あんなに踊りやすいフロアは、いままではなかったわ。私は満員のお客さまとともに踊っているような錯覚に陥り、暖かみのこもる雰囲気の中で舞い踊りました。本当にありがとう」と。

そこで私は黛さんを見直しました。

やはり黛さんも踊る人——。踊りやすいフロアがどんなものかを、よく知っていたのでしょう。あるいは日夜、黛さんのところのお弟子さんが、懸命にフロア磨きをしていたのかも知れません。

やはり、餅は餅屋です。専門外の私の眼と、同じ道を研鑽してきた人びととは、やはり根っこの部分で違いがあると思われる。金白峰さんは、大韓民国芸術院会員であり名誉理学博士でもあります。現在、金白峰舞踊団の団長であり、また慶熙大学校舞踊科の教授もしていられっしやいます。であればこそ…、というわけでもなかったのですが、私は、はじめ踊る場として高い舞台の必要性を感じたのでした。しかし、最大に踊りやすかったというフロアで、金白峰さんが、真の踊りと芸の奥義を表現することができ、また、これに魅惑された真摯の眼の人びとと、じゅうぶんに“交感”できたのだとすれば、これに越した文化交流はなかったのではないかと思うのです。

散 調



散 調



金 白 峰 韓 国 伝 統 舞 踊 公 演

平成3年11月7日～9日
黛民族舞踊文化財団第39回

民族芸術文化に関する研究会
黛アート・サロンにて

(賛助会員)

松 崎 国 雄
牧 原 満 男
松 山 和 子
松 原 剛

丸 山 栄 子
松 浦 静 子
松 長 英 子
水 野 洋 一

三 橋 達 也
宮 本 亭
黛 智 英
黛 莉 香

森 幸 枝
森 永 みの子
村 田 けい子
宗 像 富美子

内 藤 寛 子
西 尾 学
西角井 正 大
新 田 嗣治朗

日本で踊ることについて

キム ベク ボン
金 白 峰

民族芸術の高揚を図り、国際的に幅広い文化活動をしていらっしゃる黛民族舞踊文化財団理事長の黛節子女史と私は、このほど固い握手で結ばれました。そして不肖私も日韓舞踊文化の交流に尽力させていただくチャンスに恵まれ、きわめて嬉しく思っております。

このたび、財団法人黛民族舞踊文化財団主催の「民族芸術文化に関する研究会」として“韓国古典舞踊の会。”が開かれ、日本の皆様に、韓国の伝統舞踊をご紹介しますことは、大へん意義深いことだと存じます。

今回の舞台で皆様にご披露いたします韓国伝統舞踊はいずれも、私の創作によるものでございますが、このつたない作品からでも、伝統舞踊のこころを感じ取って下されば、幸いに存じます。

これを機会に、日韓両国の友好と親善の絆が強く結ばれ、より高い文化・芸術の交流の道が開かれますよう願って、私のごあいさつに替えさせていただきます。

(大韓民国芸術院会員)



扇 舞



鼓 舞

プログラム

第Ⅰ部

- | | |
|------------|-------|
| 1. 花 冠 舞 | 金 白 峰 |
| | 鄭 鎮 漢 |
| | 沈 惠 瓊 |
| 2. 緑 陰 芳 草 | 鄭 鎮 漢 |
| | 林 聖 王 |
| 3. 杖 鼓 舞 | 林 聖 王 |
| | 沈 惠 瓊 |
| | 金 蘭 頭 |
| 4. 雄 飛 | 鄭 鎮 漢 |

(写真撮影) シャッセただお

(賛助会員)

中 前 勇	成 沢 節 子	新 田 陽 子	小 野 成 子	大 野 晃
中 西 好 子	根 岸 初 子	奥 山 素 章	小 原 ゆかり	大 西 智恵子
中 尾 学	長 倉 和 子	奥 田 勲	大 島 昌 代	大 井 昭 伍
長 崎 和 男	野 口 よし子	岡 田 茂	大 口 信 夫	大 川 安 子

韓国金白峰女史来日舞踏会

黛 節子

金白峰女史は韓国伝統舞踊の第一人者である。かつては日本に住んで居られた事もあり桜蔭は彼女の出身校である。その女史は今韓国慶熙大学舞踊科教授でもあり、韓国の伝統舞踊を素材として創作活動もなさっているのである。

去る11月来日が決まり、11月7日より11月9日まで黛アートサロン公演が実現となった。

女史は林聖玉、金蘭顯、沈惠瓊（女性舞踊手）鄭鎮漢（男性舞踊手）の生徒を同道してまことに、絢爛たる韓国舞踊を発表した。このアート・サロンはモスグリーンのビニタイルを貼ったフロアシステムである。従って観客も同じフロアで観る。このフロアで舞踊する時、照明が舞踊家を取りまわるとき、フロアはその光の粒子を吸いハレーションを発散させ、最も良

い雰囲気を作ってくれる。

演しものは、花冠舞、杖鼓舞、雄飛、扇舞、鼓舞、そして散調等々で、これ等の踊りの司会は、黛節子が務めさせて頂いたのだが、黛は旦って韓国を訪問した時お土産に戴いたかの民族服のチョゴリをつけた。舞踊の解説を舞踊家がつとめさせて頂くのは、多少でも踊る方のお役にたちたかったからである。

ひと言にいて此の日の舞踊はカラフルで歯切れの良さ、その中に温いねばりが感じられた。特に扇の踊りの華麗な色気は金女史ならではの感があり、中間にチャング（韓国舞踊に必要な太鼓）に関する技術の説明を金女史と黛の対談で行った。そして、この公演の最後は“散調”と名づけた金女史の創作（20分の長さ）でしめくくられた。彼女の再起不能となった事故から立ち上るまでの苦しみを舞踊に表現したものであった。内容的に深く、テクニックの高度さがかもし出す表現の豊さに於いて、彼女が綴った舞踊の文学と云えよう。

彼女はこのフロア形式の舞台を大変喜び、観客と目がピッタリと合う近さ、こうした舞台で踊ることは自分の表現と観客の感度がピッタリと合う。その喜びがあった、とても踊りよかった。“こういう舞台は私は大好きです。とあの特徴あるハスキーヴォイスで語ってくれた。

韓国の至宝「金女史が日本公演で、心地よく、そして心ゆくまで踊って頂きたい」と一心こめた主催者側の願いが叶ったのであった。

本国にあって、この公演に関して多大の御支援を頂いた。
大韓民国文化公報部海外公報館製作課長（当時） 朴暉煥氏
在日本大韓民国居住民団中央本部団長 丁海龍氏
駐日大韓民国大使館韓国文化院院長 金光植氏
に厚く心からの御礼を申し上げる……。

（黛民族舞踊文化財団理事長）



鼓 舞

司会・解説 黛 節子

5. 扇	舞	金 白 峰
6. 鼓	舞	鄭 鎮 漢
		林 聖 玉
		金 蘭 顯

第Ⅱ部
散 調 金 白 峰



花冠舞

（賛助会員）

大 場 和 子	岡 本 春 雄	佐 治 敬 三	白 井 永 二	下 山 光 悦
小田部 康 伊	冷 泉 貴美子	清 水 と き	白 明 徳 子	佐々木 徹
折 田 克 子	七 田 基 弘	鈴 木 修 次	白 山 明 子	関 野 智 子
帯 谷 瑛之介	鹿 海 信 也	佐 藤 浩 子	白 井 信 子	白 神 郁

七 草 の 宴

黛 節子

『七草の宴』も回を重ねること10回になろうとしています。

お正月の御馳走で少々食もたれ気味のお腹には、真ッ白いお粥に真ッ青な七草を添えてすすめる味わいも又いいのではないかと考えたのが発端でした。然し、回を重ねるうち考えも少しずつ変わってきました。

七草の起源は勿論のこと、お米の原点や、自分自身の天職とと思っている民族舞踊との関係等々。

加えて毎年参列させて頂いている、奈良天理の石上神宮の鎮魂祭(11月22日)とその翌日行われる新嘗の御儀に、神前に捧げられる新米で作られた白酒を頂くことの意義。

森宮司からお教え頂いたことは、それは、新しき「米の気」という霊気を頂くことと伺いました。当家の七草粥は毎年、石上神宮にお供え申し上げた新米で作らせて頂いています。

又、中国舞踏家協会雲南分会と当財団との日中民族舞踊永年友好交流のおかげで、お米の原点と言われる雲南の地を再三訪れることが出来、お米に対しての関心が益々深まってきました。

雲南では白、赤、黒、紫、黄、五色のお米があり、私もそのうちの数種を味わう機会に恵まれました。

お米が渡ってきた道。私はこれをライス・ロードと称していますが、お米と共に様々な文化がこの日本にもたらされたことと思います。

これらのことを、より身近なものとする為、七草のお粥も2年程前から赤米のお粥も加えました。お味はこっくりと美味しく、皆様方にも喜んで頂いているようです。

最近、各方面でも七草粥を見直す気運があるようですが、米の気を食して一年の健康を願う祈りの心

は大変に美しいことと思います。

米の気。その気こそ農耕民族にとって切っても切り離せない祈りであり、民俗芸術の大切な原点でもあると思うのです。

もう一つ、当家にとっての誇りは、この七草のうち、現代では希少価値の高い御行と仏の座が我が家の庭で、精気に満ちて育ってくれていることです。それというのも、実は私を若い頃から後援して下さっている、三井不動産・江戸英雄相談役の御陰なのです。

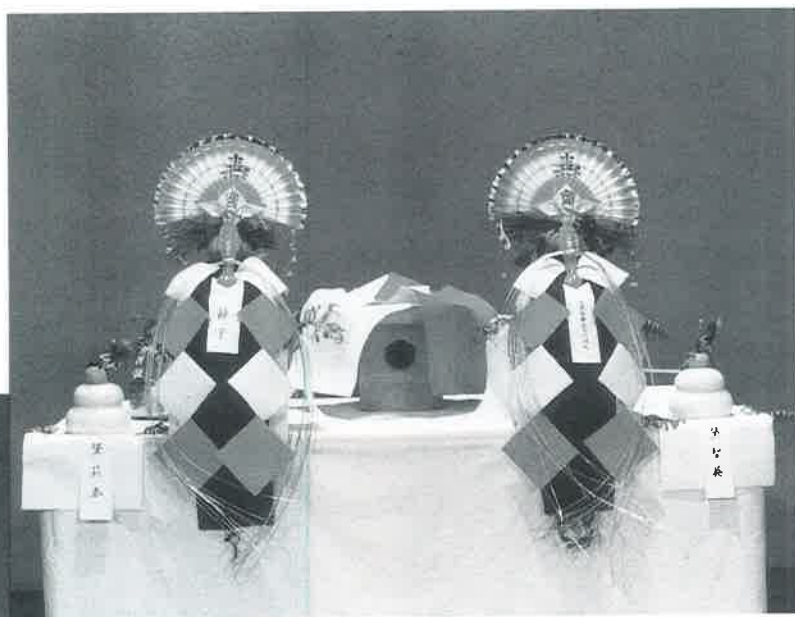
江戸さんは野菜作りが大変お上手でいらっしゃって、私も時折かぶらやキャベツ、白菜、大根等、土のついたままの手造りの作品を頂戴するのですが、その新鮮で美味しいこと。

頂戴するだけでなく、お野菜の作り方までお教え頂いたのに、この不徳の弟子は一向上達しないまま今日に至って居ります。

但し、そのおかげで、七草の御行、と仏の座だけは、我が家の庭で育てられるようになりました。



七草粥を接待する黛理事長



七草の祭壇

(賛助会員)

砂 村 妥 女
山 東 宮 子
佐 藤 秀 市
島 崎 道 子

鈴 木 良
鈴 木 美代子
鈴 木 聖 子
武 田 寿

武 田 章
武 田 輝 夫
武 田 悦 子
高 橋 雅 夫

田 島 容 子
田 沢 敦 夫
谷 村 美恵子
田 中 良 子

田 中 栄 子
立 石 喜久子
豊 田 広 子
戸 張 静 子

七夕の花扇

黛 節子

かつての日、

年毎に訪れる七夕

近衛家では、自作の和歌に

桔梗、かるかや

萩、女郎花など、など

秋の花々を、扇にそえて

花扇とし、それと共に

宮中に献したと

いわれて居ります。



近衛家の花扇を踊る黛節子



七夕の由来を語る黛 節子

黛民族舞踊文化財団のあらまし

当財団は昭和61年3月に民族舞踊文化に関する、公演、育成、研究等を通して広い視野と構想のもとに活動をしていくという目的をもって文部大臣より認可された財団法人であります。財団も、皆様の御理解と理事長の並々ならぬ民族舞踊文化に対する熱意により確実にその成果をはたしてきました。

伝統を重んじつつもそれを将来へ伝える為に舞踊が文化にいかなる務めをはたしているのが、我が国のみならず韓国や中国雲南の少数民族との永年にわたる密接なつながりをもつことにより、国際的な文化交流の実を上げてまいりました事は御理解いただけたと思いますが、今後とも尚一層の活動を行なう事が、当財団に課せられた責務であり、又なし得る事と考えて居ります。それらの事業をより有意義なものとするには、まず経済的な基盤の確立が必要と痛感せざるをえません。

当財団は右記の規定による“賛助会員規定”を設けまして、財団への皆様の心からの御支援と御理解を賜ることにより、一層の責をはたしていけると存じますので、“賛助会員”として会費による御支援をお願いした次第です。

(財)黛民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、賛助会員とは、この法人の主旨目的に賛同して入会くださった個人・法人（団体）方々の名称です。

二、会費寄付の内容は下記の通りです（但し、年間会費として扱わせていただきます。）

ア、個人の場合 個人会員 一万円以上
特別個人会員 十万元以上

イ、法人の場合

法人(団体)会員 十万元以上
特別法人(団体)会員 百万元以上

三、賛助会員の特典

ア、特別会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様招待
- 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。（賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛て、御請求くださいませ。）領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。

(賛助会員)

徳 山 素 琴
竹 崎 宇 吉
竹 中 広 夫
竹 本 越 道

多 田 侑 史
坪 倉 朕
上 野 和 子
上 野 千代子

白 井 渕 子
海 野 麻 次
内 海 陽 子
吉 田 正

山 折 哲 雄
山 田 三 耀
山 口 太一郎
山 口 清

山 脇 亀 雄
矢 野 輝 雄
安 田 敬 一
安 本 義 正

中国と韓国
舞踊の花・華



中国少数民族傣族の刀美蘭の水をくむ女



チャングについて解説をする
黛 節子と金白峰

(写真撮影) シャッセただお

民族舞踊文化 No. 5

1992年4月23日発行 発行人 黛 節子 編集 井上 章

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel 03-3583-3633代
Fax 03-3583-3670

財団法人 黛民族舞踊文化財団

特別頒価 ¥1,000

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO